

平成8年3月 発行

大東文化大学紀要 第34号 拡刷
〈人文科学〉

一一

江紹原と周作人（II）

—「礼部文件」その後（上）

小川利康

Jiang Shao-yuan (江紹原) and Zhou Zuo-ren (周作人) II

—Their works after *Libu-Wenjian* (「礼部文件」)

Toshiyasu Ogawa

江紹原と周作人（II）

—「礼部文件」、その後（上）

小川利康

Jiang Shao-yuan (江紹原) and Zhou Zuoren (周作人) II
—Their works after *Libu-Wenjian* (「礼部文件」)

Toshiyasu Ogawa

[三]

次

- 0 はじめに
- 1 江紹原について
- 2 宗教をめぐる論争——帰国後の江紹原の活動
- 2.1 宗教をめぐる環境
- 2.2 ラッセルをめぐつて——宗教的なものの価値
- 2.3 宗教による社会改革の理念——「メトセラへ帰れ」劇評から
- 3 宗教学から民俗学へ
- 3.1 小結（以上、前号）
- 4 承前
- 5 「礼部文件」をめぐる環境——身辺の問題
- 6 「現代語譜」と「語縦」
- 6.1 新『晨報副刊』への参加
- 6.2 中山大学転任と辞職
- 4 北京へ（以下次号）

5. 承前

二五年一月、『周作人早年佚簡箋注』所収の冒頭書簡で、江紹原は周作人に宛てて、率直にこう記している。

適之先生（胡適）に書かれた先生の手紙を、適之先生が私にも読むようにと送つて下さいました。お気持ちは勿論大変ありがたく思います。しかし、私にも私なりの苦衷があります。中国の政局と教育に、にわかに希望がもたらされるとは思えません。今のこうした状況で、私が大学教授の看板を掲げていたところで、中身に充めるべき学問とてなく、自分でも辛いのです。むしろ別のことやつて、個人の問題を解決してから学問に取り組みたいと思います。^{〔1〕}

この中で述べる「中国の政局と教育」が具体的には当時表面化しつつあった女師大事件のみを指すのか、当時の政局の混乱全体を指すのかは判然としない。また、この手紙への周作人の返信も含め、関連する書簡は現在残されておらず、文中で言及する胡適から転送された手紙の文面も、恐らく江紹原の北京大学の辞職に係わることを述べたもの、と推測するほかない。この後間もなく江紹原は北京大学をいったん辞して、武昌大学英文系へと転じている（北大復職は翌二六年秋）。さしあたって右の文面から確実に読みとれるのは、政局への絶望に加え、自身の研究への疑問に苛まれていた江紹原の心情である。武昌大学にはわずか半年しか留まらなかつた奇妙な行動の背景には明らかに自身の学問への疑問、つまり、前回に既に述べた挫折感が横たわつてゐることは間違いないだろう。

前稿においては、「礼部文件」までの両者の交流前史として、一九二〇年代前半の江紹原について論じた。そこで明らかになつたのは、五四時期の社会的理想を自らの宗教学において実現しようとした性急さによつて自ら傷ついた姿であつた。理想への性急さと挫折後に味わうことになる現実との疎隔感は、いわば五四時期の知識人の典型とも言えるだらう。

右に引いた周作人宛の私信は、そうした挫折感と自己不信が吐露されたものとして読むことが出来る。既に前稿でも触れた「礼的問題」（『語絲』三号）は、自ら研究の破産を初めて公に語るものであり、民俗学研究への転回点を印すものであつたが、新たな研究が安定した形をとるまでは時間が必要であった。その脱皮のプロセスで『語絲』に掲載された散文の殆どは周作人宛の通信の体裁をとつており、内容の上でも周作人の論点と多くの点で共通する。いわば周作人のスタイルを積極的に模倣することによつて、江紹原は当時の現実状況と自分の治学方法との一致をはかるうとしていたかにみえる。このプロセスは、ほぼ「礼部文件」の執筆時期と重なるのである。

本稿、及び次稿では、改めて「礼部文件」が書かれた『語絲』創刊前後の二四年から『語絲』南遷の二九年までの間、周作人への共鳴と、その影響受容の中で、江紹原がどのように独自の民俗学的思考へと転向を遂げたのかを明らかにし、「礼部文件」を集成した『髮毬爪——關於它們的風俗』、および当時の講義録「中国礼俗迷信」に見いだされる周作人の影響の跡を検討する。また同時に、この時期は江紹原がいつたん北京大学を辞し、廈門大学、中山大学と国民革命の混乱の中で転々としながら、胡適、魯迅、傅斯年らとの錯綜した人間関係に苦しんだ時期でもあり、いわば江紹原にとつては純粹に學問的な立場に止まらぬ、様々な形での思想的な選択を迫られた時期でもあり、周作人・江紹原の関係を定位する上でも、当時のこうした状況の検討は不可欠となる。以下では、周作人との思想的な影響関係を論ずる前提として、その実情を整理し、検討してゆきたい。

6. 「礼部文件」をめぐる環境

まず、この頃の江紹原をめぐる当時の『語絲』・『現代評論』をめぐる人間関係を整理しておくことにする。『現代評論』は後日の新月派の作家達が執筆していたことでも知られる。その殆どは欧米留学経験者であり、江紹原と親しいメンバーも多かつた。後に新月社の理事長ともなった胡適は、その代表的存在であるが、胡適と江紹原は縁戚関係⁽³⁾にあり、北京大学の同僚でもあった。ところが、こうした関係がかえつて江紹原にとって不幸な結果をもたらした。

6. 1 『現代評論』と『語絲』

『語絲』創刊の翌月（二四年十一月）には、国民党右派の援助を受けて、『現代評論』が創刊された。主な執筆メンバーは胡適・陳源などの欧米留学経験者で、江紹原も二五年秋までは書評など四篇を寄稿している。周知の通り、この『現代評論』と『語絲』との間で、女師大事件、三・一八事件をめぐる激しい論争が起きたが、創刊の時点（二四年十一月）では両者の対立は先鋭化していなかつた。例えば、後に廢名として名前を知られる馮文炳も『現代評論』に短篇一篇を寄稿し、意識の上では従来の『努力週報』（胡適主編）に寄稿していた延長線上で参加していたのは明らかであり⁽⁴⁾、江紹原にても同様の意識だと言つてよいだろう。少なくとも当時の江紹原の意識の上では、『現代評論』への参加は特段考慮をするものではなかつたはずである。

とはいへ、胡適と魯迅周作人兄弟との思想的分歧は当時すでに明らかであり、江紹原の目にもそれは明らかに映じていたはずである。にもかかわらず、『現代評論』に加わった第一の理由として、欧米留学派というグループに属していたという事実が指摘できるだろう。その中心的な存在で

あつた胡適とは縁戚関係もあつたうえ、胡適、陳西滢はいずれも北京大学文学院に属す同僚であり、胡適は同じ哲学系、陳西滢は英文系と、専攻上の共通の話題も少なくなかった。⁽⁵⁾ また、かなり早い時期から新月派の祖型ともなるサロン的な会合も開かれており、歐米留学派で広く交流を持つ機会も少なくなかつた。⁽⁶⁾ 江紹原より一足早く帰国した徐志摩と出会つたのも、こうした場であつたと考えられ、いわば誕生直前の新月派の周辺にいた訳で、『現代評論』の執筆者である以前に、胡適らのグループの一員として目されていたことは明白たる事実である。後述するように、徐志摩主編の『晨報副刊』への一方ならぬ協力ぶりにも、その事情は伺い知ることが出来る。

こうした周囲の環境の中で、江紹原自身は二五年三月には北京大学を一旦辞して武昌大学に転じ、七月には再び北京大学に舞い戻るなど、生活研究ともに不安定な時期であった。すでに冒頭でも記したように、明らかに研究の指向性を巡つての不安と困惑で苦しんでいた時期であったと考えられる。発表された文章の数も少なく、概ね短いものである。翌二五年末から「礼部文件」関連の民俗学研究が本格化するまで、発表作品の内容も系統立てられたものとは言えない。緻密な議論を好み、資料を博搜する江紹原としては生涯でも寡作の時期といえる。「礼部文件」に係わるものは後に譲るとして、ここでは、この当時の江紹原への評価の一端が伺われる一つの事件を見ておくことにする。

ちょうど江紹原が北京大学に舞い戻つて間もない九月、魯迅主編の『莽原』（第二〇期）に読者からの投書が掲載された。八月に学生と学校側の激しい対立によつて女師大が強制的に閉鎖され、これに強く反発した魯迅・周作人らが女師大校務維持会を発足させ、学校側を擁護する『現代評論』と激しく論戦していた時期である。書簡は魯迅に宛てられ、そのなかで読者は「思想界」の低迷を指弾し、なぜ猛進社、語絲社、莽原社による連合戦線を結成して、共通の敵である『甲寅』『現代評論』を攻撃しないのかと訴え、その上で『語絲』掲載の江紹原の「倣近人体罵章川島」（『語絲』四一期）を評して、次のように述べる。

こんな『現代評論』向きの素晴らしい文章が『語絲』に掲載されるとは思いもよらなかつた。まつたく、この世界では誰と誰が敵なのか、味方なのか？私たちはめちゃくちやに握手し、殺し合う悲しさを覚えます⁽⁷⁾

」のよう述べた後、「江紹原の『雜種文』の文体を真似」た文章では、次のように記す。

『江紹原はといふと、学者の人格たたき売り会社と一般に称される現代評論社の第×支部支配人であると言われる…』⁽⁸⁾

批判の対象となつた江紹原の文章は、女師大閉鎖を断行した教育総長章士釗を批判するものであつたが、ストレートに章士釗を批判するのではなく、同姓にことよせて章川島を戯れに罵倒するものであつた。同時に表題通り「近人の文体を真似て」、すなわち、誹謗中傷が日常茶飯事であつた雑報類の文体を模倣した戯文であつたので、誤解を招く原因是文章自体にもあつた。だが、この文章と前後して、北大の学内では、周作人ら八名の連名で章士釗を教育総長とする教育部との関係断絶を訴える書簡⁽⁹⁾を発表しており、関係者の間では江紹原の政治的スタンスが『語絲』と一致することは、あまりにも自明であつた。だが、それは舞台裏の見えない読者にも通ずることではなかつたようだ。

この投書で注意を引くのは、女師大事件をめぐる激しい論戦で『語絲』・『現代評論』双方に寄稿してきた江紹原の立場に対する厳しい指弾である。江紹原自身、この点については神経質になつておらず、投書が誤解に基づくにも係わらず、『莽原』読了後ただちに『晨報副録』で「現代評論」を書いて反論している。まず「倣近人体罵章川島」で誤解された章士釗批判については、「最近、章士釗問題が持ち上がり、私の立場と『現代評論』のそれとは、ますます隔たつてきているようであるが、一部分ながら『現代評論』への好意は今でも残つてゐる。残念なのは章の問題については私の見解を代弁するものではなく、親友の俞平伯の前では『現代評論』への不満を漏らすほどであった」⁽¹⁰⁾と、女師大事件に関しては『現代評論』と一線を画することを明言したうえで、特定の党派に偏らない立場を強く主張する。

私は改めて聲明する。私自身が新聞・雑誌を自ら発行するのではないかぎり、すべての刊行物との関係は試行的なものであり、部分的なものであり、可変的なもので、いつ、どんな問題についても、内容に即して決まるのだ。あらかじめ無条件にどの刊行物が我が「友」であり、わが「敵」であるかを決める出来ない。⁽¹¹⁾

また、「この週刊誌（『現代評論』）が氣に入らぬ人々は、私、陳西滢、章士釗、『現代評論』などを一緒にたにして攻撃罵倒を度々繰り返し」と指摘しており、誤解による非難が少なくなかったことを示している。活字上以外の場でも、さまざまなかたちで『現代評論』との関係について疑問、さらには批判が繰り返されてきたと考へてよいであろう。かつて魯迅の戯れうた「我的失恋」を巡る紛糾の結果、主な発表の舞台としてきた『晨報副録』から編集担当の孫伏園が辞職、その後を継ぐものとして『語絲』は創刊された。その意味で『晨報副録』での書き手であった江紹原が『語絲』に参加したのは極めて自然なものであつたが、『語絲』は『晨報副録』とは異なり、明らかに党派性の強い同人誌的な雑誌であつた。周作人が事実上の主編をつとめ、校正印刷などの編集実務をかつての教え子たちが担当する形で携わる以上、意識の変化は当然でもあつた。さらに二五年当時の『現代評論』との厳しい対立関係の中につけて、なおも党派性を越えて、さまざまなメディアとの自由な関係を江紹原が主張したと

ころで、現実世界での説得力としては極めて薄弱とならざるを得なかつたのは致し方ないであろう。この声明の後、江紹原は一度と『現代評論』に執筆することはなかつた。

とはいへ、党派性のエゴに完全に屈服したわけではないことは、次のように強く述べていることからも窺われる。

よしんば双方の雑誌・友人が、何事についても同調する友人でないからといって、私を拒絶するのであれば、それも結構だ。私が守りたいのは、独立した非 faction (党派的) 精神だけであつて、私自身の言論発表の場については心配いらない。⁽¹³⁾

こうした決意が困難であったことは、後に同様の事件が再び繰り返されるとからも明らかだが、『現代評論』への不参加が江紹原の執筆スタイルを変えることはなかつた。また、信念上の問題だけではなく、今回の投書の誤解が江紹原一流の反語的な文体によるものであつたことも確かだが、文体の上でも変わることはない。後述の「札部文件」でも窺われるよう、ややテンションの高い文章には彼なりの自負があり、その自負を背景として、二五年当時しばしば、文学作品や翻訳の未熟さをつく批評を書き、『現代評論』や『晨報副録』で最近の文章について「余りに『表現する』(原文「作」)ことにこだわらなすぎるために、私の反発を感じる」と述べて文章推敲の重要さを説いたがために、今回の『莽原』の投書でも「推敲の大教育家」と皮肉られていた⁽¹⁴⁾。

6. 2 新『晨報副録』への参加

二五年秋、北京大学に戻った江紹原は一連の「札部文件」の執筆を本格的に開始、雑感的な文章は相対的に減少する。この時期の主な発表の場となつたのは、『語絲』に加えて『晨報副録』であつた。二五年十月から、徐志摩を主編として紙面改革を行なつて再出発した『晨報副録』は当初、徐志摩が独り筆を揮うもので、党派色は感じられなかつた。徐志摩と江紹原との交流がいつ頃始まつたかは明らかではないが、二三年に江紹原が帰国した頃には、新月社が発足、二四年秋には梁实秋も北京大学にも出講しているうえ、創刊したばかりの頃の『語絲』第三期にも寄稿しており、『晨報副録』主編になつた頃には既に面識があつたと想像される。『現代評論』と『語絲』とでは既に決定的ともいえる対立関係があつたが、『晨報副録』の主編たる徐志摩と『語絲』の間には緊張関係はなかつたようだ。明けて二六年始めからは、周作人と陳西滢との間で女師大問題に関連して、閑話論争が始まるが、その前後の周作人宛の徐志摩の書簡を見る限りでは、決して徐志摩との関係を悪化させるものではなかつた。

誌面での周作人と徐志摩との交流は、二五年十一月からで、「接吻發凡」(夏斧心訳)⁽¹⁵⁾ (ハプロック・エリスの『性心理学の研究』の一部を訳

出）の誤りをただす公開書簡から始まるが、その書簡の中でも周作人が「第一院（北京大学文学院）の階段で度々お目にかかるつてはいるけれども、ゆつくりお話しする機会がありませんでした」と述べているように、面識は以前からあつたようだ。

この公開書簡に応えるなかで、徐志摩は率直に孫伏園が編集に当たつた当時の『晨報副録』の活況が過去のものとなつたことを惜しみ、なおも「我々は切に作人先生及び以前の副刊の常連作者達にもかつての交情を忘れぬよう希望する」⁽¹⁾と述べ、副刊の紙面改革を期に改めて寄稿するよう呼びかけている。

こうした提案と前後して、江紹原は『語絲』での「礼部文件」の連載を、『晨報副録』に移し、以後長文連載の殆どを『晨報副録』で展開する。一九二五年十一月に『語絲』五三期で予告された「礼部文件之八」は『晨報副録』で連載を開始しているのである。また、偶然の符合にも見えるが、「礼部文件之八」連載開始と同時に『晨報副録』には『語絲』五四期の広告が初めて掲載され⁽¹⁸⁾、以後年内はほぼ毎日広告が継続される。單なる偶然と考えるよりも、江紹原も交え、周作人らの『語絲』グループの一部と『晨報副録』とで友好的な関係を醸成して行こうとする試みが存在したと考えた方が事実に近いであろう。文学上の志向でも、徐志摩と周作人は多くの点で共通項を有していたことは確かで、一九二五年十一月から連載された翻訳「カンディード」（ヴォルテール作）にしても、周作人が『自己的園地』のなかで触れて以来、その名を知られるようになつた作品であり、単行本として刊行したのは、新月社ではなく、魯迅周作人の著書を出していた北新書局であったことからも窺われるよう、両者を結ぶ共通項は少なくなかつた⁽²⁰⁾。江紹原の「礼部文件」の『晨報副録』への移行には、周作人・江紹原側と徐志摩側双方の思惑が働いていたと推測される。

ところが、そうした試みは、明けて一九二六年一月十三日に、徐志摩が「『閑話』引出来的閑話」を書いて、陳西瀧の「閑話」（『現代評論』掲載）に言及し、陳のアナトール・フランス論を賞賛するに及んで、周作人の反発を買つて、失敗に終わる。徐志摩としては、これまでの女師大事件に係わる論争に終止符を打つ意図から、冒頭で陳西瀧の文章を「羨ましいほどに美しい」と讀んだうえで、「神よ、どうか今後語るのは閑話だけにして、一度といらぬ世話を焼きませんように」と述べていた。当然、「いらぬ世話」（原文・閑事）とは女師大など時事に関する論評を指し、婉曲ながら論争を諫める意図から述べたものと考えられるが、結果的には全く逆の効果を招くことになつた。

徐志摩は、文中、陳西瀧が A・フランスに学ぶところが大きいと指摘し、文章だけでなく「人生に対する態度であり、諷刺の中にも忍耐があり、忍耐の中にも諷刺があり」、「理性だけが唯一の（判断）基準であり、憐憫だけが唯一の（行動の）動機である」と賞賛し、女性に対する態度も同様であるとしていた。後に、徐志摩自身が意図せぬ事と弁明しているものの、確かに陳西瀧礼賛という趣である。周作人の「閑話的閑話之閑話」は、まさしくこの点を痛烈に批判するものであつた。

陳先生はある時の閑話では女師大を維持している教員達に反対して、「女尊男卑」と「諷刺」し、また別の時の閑話では女大（女師大を改組、章士釗によって設立された）を応援して、今度は「女尊男卑」を「忍耐」したのは、恐らくフランス流の正統的な態度なのでしょう？⁽²³⁾

こう述べるとともに、徐志摩は當時北京におらず、「詩人であつて、いささか迂遠なために時として少々ペテンをかけられ、事実を見抜けないことがある」⁽²⁴⁾として、陳西瀧とともに批判することは避けているのは、徐志摩への好意の表明であろう。周作人の批判とともに掲載された徐志摩「再添幾句閑話の閑話乘便妄想解説」⁽²⁵⁾では、その意図に感謝しつつも、江紹原からはすでに口頭で批判を受けたと語り、不明を詫びているが、既に矢は放たれた後であった。この後、一月末の徐志摩の終息宣言にもかかわらず、『語絲』『現代評論』を舞台に論争は三・一八事件を経て、更に激化することになる。とはいえ、徐志摩・周作人の両者の関係は不思議なほど悪化してはおらず、この頃の書簡で、周作人は自著を贈り、『語絲』にも寄稿するよう依頼している。⁽²⁶⁾さらに江紹原が両者の間に立つて関係の悪化を防ぐための話し合いに加わっていた旨、徐志摩は周作人に宛てて説明している。

（帰省のため）出発後は（江紹）原兄に副刊をお願いしますので、大兄ほか皆さんにお手伝いいただき、続けていただければ有り難いです。
(中略) 今度の論戦のことで、今日は（愈）平伯、（江）紹原、今甫（楊振声）諸兄と話し合い、皆もこれで論争を終息させるべきだと考えて
います。双方の友人で調停し、過ぎたことは水に流し、無意味は争い事はやめにして、今後は皆で本当の敵に力を合わせて立ち向かいましょう。⁽²⁷⁾

この書簡から、江紹原が主編代理の任を託された理由⁽²⁸⁾がある程度読みとれるだろう。徐志摩の春節の帰省自体は予定されたものであつたが、江紹原が代理を託されたのは、書簡で述べるとおり、陳西瀧、周作人双方に面識があり、説得しようと期待されたからであろう。当初徐志摩が希望していた『語絲』のメンバーからの寄稿は期待できなくなつたとはいえ、江紹原自身は中心的な執筆者として『語絲』以上に『晨報副録』で活躍する最大の理由もここにある。後の『晨報副録』との決定的な決裂もまた徐志摩との関係のためではなく、新月派の他のメンバーとの問題からであつた。

二六年九月半ば、江紹原は『語絲』での「札部文件」連載再開を告げ、「緊要声明」として、「小品（一）～（七）」は、七月分の『晨報副録』を参考。(八)より『語絲』で発表することにする。同時に、今後晨報社には一度と寄稿しないことを、「こゝで明らかにしておく」（『語絲』九七期）として、理由は後日別に述べるとしていたが、結局明らかにされることはなかつた。この間の事情を窺わせるものとして、『晨報副録』文中で連

載中途打ち切りについて述べる次のようにくだりがある。

途中で新しい一座に鞍替えするというのも読者に不便であり、しかも憤然と WALK OUT してしまって、「土用休み」の「学者」「紳士」方に覺られれば、また色々言われるではないか！⁽²⁾

この文章は、七月末に「礼部文件」の連載を一旦打ち切った後、連載の文章が中途半端にならぬよう配慮して、八月末から連載を再開した際に付された冒頭の「声明」である（九月七日で連載終了）。文中の「学者」「紳士」は明らかに現代評論グループを指しており、「晨報副録」との訣別するに至った彼らとのトラブルは連載打ち切りのあった七月以前のことであろうと考えられる。この七月は、徐志摩が結婚の準備も兼ねての旅行により不在で、江紹原が再び八月はじめに徐志摩が帰京するまで主編をつとめていた時期でもあり、トラブルも徐志摩の不在中にあつたことと想像される。江紹原は二月にも主編代理をつとめ、その際に余上阮から雑誌の広告の扱いをめぐって抗議を受けており、類似したトラブルが再び起きたても不思議ではないからである。「後局大院江宅的家人叩裏」（『語絲』七八期）を読めば、春から江紹原と陳西滢らとの不協和音が既に表面化していたのは明らかで、すでに江紹原にも改めて「非faction（党派的な）精神」を主張する余裕はなかつたようだ。「江宅家人」、家の使用人の名前を借りた相変わらずの戯文で、次のように記している。

このたびうちの旦那様が手前に書かせました手紙は、もしかしたら余（上阮）の旦那様や他の方を怒らせるかもしれません。そこで旦那様は私に一筆お詫びの言葉も付け加え、旦那様は近來「三不（しない、を三遍の）主義」を信奉し——どこの旦那様も親方と仰がない、仰がない、仰がないと唱えては叩頭しておるとお話しするようにとのことでした。でも、ちょっと違うのは、湖北の旦那様方には三遍「しない」唱えたうえに、もう一遍唱えて、つづく四遍「しない」となります。⁽³⁾

「湖北の旦那様方」、とは、余上阮が湖北沙市人であるためで、余に代表される現代評論派を指す。些細なトラブルでありながらわざわざ活字にしたのは、それだけの背景があつてのことであろう。これまで中心的な存在として活躍してきた「晨報副録」さえも去らざるを得ない決定的なトラブルが徐志摩の不在中に起きたと考えるのが妥当であろう。党派的な動きを嫌つた江紹原にしても、周囲の環境が既に自由な選択を許さなくなっていた。皮肉を込めた反撃の文章にしても『語絲』に掲載された以上、江紹原自身、当時の『語絲』、『現代評論』の対立の構図の中に取り込

まれていることになり、自縛自縛であった。

この頃の『晨報副録』は、副刊附録『詩刊』（徐志摩、聞一多ら参加）が休刊（六月）、徐志摩自身も念願の陸小曼との結婚を目前としており、江紹原とは陰悪な関係の余上阮が主編をつとめる副刊附録の『劇刊』も九月には終刊となる。徐志摩は十月に結婚すると間もなく上海に居を移し、同時に『晨報副録』主编もアメリカ留学から帰国したばかりの瞿世英に譲ることになる。『晨報副録』自体は存続するが、命数はすでに尽きていたといえよう。すでに作家・文化人達は相対的に自由のある上海など南方へと移動し、江紹原自身もまた翌二七年四月には中山大学に赴くことになる。ところが、大きな期待と共に南下した江紹原を待っていたのは「魯迅派」というレッテルであった。

6・3 中山大学転任と辞職

中山大学赴任の誘いが、魯迅からのものであったことは章延謙宛で「紹原から電報で旅費を頼んできたので、今日電報為替で送金しました」⁽²²⁾と述べていることからも明らかであろう。同時に許寿裳らも誘いに応じて中山大学に赴任しているほか、章川島（延謙）のためのポストも探していることが、この頃の書簡から窺われる。江紹原自身、中山大学赴任を望んでいたことは、周作人宛の書簡で「（孫）伏園は広州に行く由、素晴らしい。いつかは私もあちらに行きたい」と語るようだ。江紹原自身の希望が魯迅に伝えられて実現した可能性もある。段祺瑞、張作霖ら軍閥が争闘に明け暮れる北京にあっては、国民党政府が置かれていた広州に憧れるのは江紹原だけではなく、知識人全般の趨勢でもあった。二七年二月の広州への出立はかなり慌ただしく、周作人から借用中のフレーザーなどの民俗学関連の書籍も夫人に託し、暇乞いの時間すらなかつたようだ。四月はじめに広州に到着、思いがけず英文系の主任となつたことなどを早速周作人に知らせている。ところが、到着間もない一週間後には、上海での反共クーデターに続いて広東クーデターが起きる。江紹原自身に危害が及ぶことはなかつたが、魯迅はテロの危険を感じ、大学には出講せず、辞職を申し出で、下宿に引きこもり、外出を避けていた。この事件と前後して、顧頊剛が中山大学に赴任し、学内の対立が激化したこともある。まず許寿裳が六月はじめに広州を去り、魯迅も九月には広州を去っている。この頃の江紹原が着任早々、授業どころでなくなつていたのは想像に難くない。ところが、魯迅は江紹原の辞職に反対していた。

江紹原については、中大が引き留めるでしょう。でも、あまり居心地が良くないのは無論です。傅（斯年）は將軍、鼻（顧頊剛）は軍師となつたのですから、その勢いたるや想像に難くありません。紹原は浙江で仕事を探したい口振りでしたが、私はます招聘状を貰わねばならないと主張しました。浙江大学は先々どうなるかも見えず、彼とて（無職で）空つ風を喰つて待つわけには行きますまい。（中略）そうしたデマを

飛ばすのは、挑発のテクニックであり、「魯迅派」に入るのを防ぐものです。だから単なる『謐』であつて、彼を追い出すまではしないでしょう。⁽³⁴⁾

この書簡は、江紹原宛てではないにせよ、同様の冷静な認識を江紹原にも話して聞かせたのであろう。「浙江大学」とは、当時南京で国民党が開校を準備していた大学で、大学院院長に蔡元培、校長にかつての北京大学代理校長蔣夢麟を迎え、江紹原にとつては、またとない転職先と思われたが、当時は魯迅が述べるようになまだ設立準備も具體化してはいなかつたため、注意を促したのである。また、文中で述べる傅斯年とはかつて北京大学の同窓生で、新潮社で共に活動した友人である。二六年まで海外にあつた傅斯年との交流は少なかつたであろうが、関係も悪からうはずがなかつた。魯迅にしても、当初は傅斯年に好意的に接していた。江紹原が中山大学に来る決心をしたのも、そうした背景があつてのことであろう。ところが、反共クーデター直後に、北京時代から魯迅と関係の悪かつた顧頊剛が赴任、事態は一変し、北京時代の『現代評論』派と『語絲』派の対立の再現へと発展した。その対立の渦中にありながら、魯迅が中山大学残留を勧めたのは、江紹原の場合は傅斯年、胡適と親しい朱家驛など、かつての『現代評論』につながる人々と相容れぬ関係ではないと考えたからである。だが、江紹原自身は非常に迷つていた。なお北京に残つていた周作人に宛てた書簡では次のように報告している。

もともとは魯迅先生と一緒に出ていこうと思ったのですが、孟真（傅斯年）はもちろん行かせてくれず、帰京して餓死してはお話にならぬで、夏休みまで持ちこたえてから改めて考え直します。⁽³⁵⁾

夏の休暇にはいると、夫人の実家の杭州へ戻り、当時刊行間近だった『髮鬚爪——關於它們的風俗』の序文を仕上げる仕事に没頭するが、九月には広州へ向かう途上の上海で、胡適に会つている。当時、胡適はアメリカ訪問からの帰途、張作霖政下の北京を避け、上海にそのまま腰を落ち着け、創立間もない新月書店に理事長として迎え入れられていた。すでに傅斯年から事情の説明を受けていた胡適は、中山大学に留まるよう江紹原を説得をしたようだ。周作人宛の書簡で、江紹原は「胡適先生には、私もお会いしました。お話を伺つて、今はすべてを振り払つて、学問に打ち込めるような気がしてきましたが、本当にそななるかどうか」と報告しており、結局迷いを振り払つて広州に再び赴くことになった。

しかし、着いてみると、希望した専門科目は担当できず、英文系の科目ばかり担当させられたため、予想以上の冷遇に憤り、到着早々に周作人に宛てて、「汪敬熙、顧頊剛は自由気まで、私はいつも支配受けているのが、最も不満です」⁽³⁶⁾と書き送つてゐる。顧頊剛と江紹原のこれまでの

関係については明らかでないが、顧頡剛らを中心として結成された広州民俗学会や民俗学叢書刊行に最後まで江紹原は全く関与することはなかつた。こうした後々の事情を勘案しても、顧頡剛の赴任によつて、江紹原が有形無形に追いつめられていたことは確かだらう。結局、辞職願いも出さずに無断で辞職⁽³⁸⁾、十月半ばには上海へ戻つた。一ヶ月どころか半月もいなかつた計算になる。十月十五日には、上海に着いたばかりとおぼしい江紹原を、魯迅⁽³⁹⁾が旅館に早速訪ねてゐる。⁽³⁹⁾ 二日に江紹原が杭州へ発つまで、二人の間では頻繁な往来がある。今後の身の振り方などが話し合われたものと思われ、杭州に発つたばかりの江紹原を追いかけるようにして、南京の国民政府大学院特約編纂員として、魯迅・江紹原二人を招聘する旨の返事を許寿裳から得た旨、書き送つてゐる。特に決まつた業務もなく得られる月三百元の収入は、この後の二人にとって貴重なものであつたはずである。⁽⁴⁰⁾ 魯迅派というレッテルが有名無実であつたにせよ、江紹原を中山に招いた責任を感じていたのであらう。この辞任後の上海滞在中に、江紹原は胡適も訪ねてゐるが、不在で会えなかつたようだ。⁽⁴¹⁾ あるいは会えば慰留されることは予想がつくだけに、形式的な訪問であつたのだろうか。事前の連絡無しに胡適を訪ねてゐる。

この後、江紹原は二九年に北京大学に復帰するまで、杭州で自分の研究に専念することになる。偶然の符合というよりほかないが、当時、魯迅・胡適双方が、語学に堪能な江紹原の力を見込んで、翻訳で生活してはどうかと勧めている。⁽⁴²⁾ その勧めを受け入れるべきかどうか迷つた経緯を、江紹原は周作人宛に次のように記している。

魯迅先生は私に文学作品を訳すように、売れ行きがよいから、と勧めてください、宗教学ではそうゆかぬと言わされました。数日間はそのつもりになつたのですが、今はどうもそんな気分も失せました。それほど自分は頑固な人間なのです。⁽⁴³⁾

周作人の返信も「文学書の翻訳に乗り換えるのはあまり賛成ではありません、興味がないのに売らんがためにやるのは意味がありません」と励ましてゐる。魯迅の書簡は、真剣に江紹原の生活を心配し、実社会への疎さを危ぶみつつも、むしろ、その疎遠さに好意を持つてゐることが窺われる文面であつた。魯迅だけでなく、胡適からの申し出も敢えて断わつた背景には民俗学への情熱もあつたが、文芸翻訳家として上海文壇で生活していくことになれば、胡適・徐志摩らの新月社と魯迅との間の確執にいつかは巻き込まれる可能性がないとはいえないなかつた。そんな思いが江紹原の脳裏によぎつたとしても不思議ではないだらう。事実、翌二八年に魯迅と些細な誤解から疎遠になつてしまふことを思えば、この江紹原の選択もあながち間違いとは言えなかつたのである。⁽⁴⁴⁾

6・4 北京へ

北京大学に復帰するきっかけとなつたのは、やはり周作人からの書簡であった。北京大学など在京九大学は、一七七年に張作霖によつて閉鎖され、それに代わる京師大学校が設立され、二八年六月に国民党政府が北京を接收した際には、中華大学、さらには北平大学と改められた。周作人も京師大学校以来、職に就いていなかつたが、二九年三月に学制改革をめぐる反対運動も収束し、北京大学が名実ともに正常化することが確定的になると（正常化したのは六月）、復職を決意し、江紹原に復職しないかと問い合わせている。

開校が何時になるかは分かりませんが、その（開校の）趨勢はかなり明確になりました。北平に戻られる気持ちはありますか？私自身としては是非戻っていただきたいし、陰曆の年明けが良さそうですが、あなたにとつて南北のどちらにいるのが良いのか分かりません。⁽⁴⁵⁾

このほかにも十一月の一ヶ月の間に四回にわたつて問い合わせ、最後には「（張鳳挙から）貴方の意向はどうか、速達を出して問い合わせてほしいと頼まれたのは本当ですので、速達は書きませんが、問い合わせるだけはともかく今一度尋ねておきます。貴方は北平に来る意思はありますか？」と、帰京を期待する気持ちを強くじませた文面を書き送つてゐる。周作人の現存する書簡でも、これだけ自己の意向を書面で明瞭に述べたものは少ない。その意向の背景として、周作人なりに『語絲』に続くメディアを作り出したい気持ちが強かつたことが指摘できるだろう。當時江紹原と二人で計画していた民俗学の雑誌は上海の趙景深らとの間で話し合いが不調に終わり、張鳳挙らが進めていた文学雑誌の計画も北京で同人が集まらぬために流産した。当時、一人でも多くの書き手を身辺に呼び寄せたい気持ちは当然強く持つていたと思われるのである。学院院長代理の張鳳挙の依頼で江紹原と親しかつた俞平伯も復帰をすすめる手紙を書き送つてゐるが、俞平伯・張鳳挙はともに三〇年に北京で『駱駝草』を刊行したいわゆる「駱群」（周作人のグループ）であった。当然、復帰の勧めも周作人の意向を反映したはずである。

一方、この頃の学制改革で、江紹原が就いていた国民政府大学院特約編纂員というポストも大学院の廃止にともない、教育部直属となり、編纂員のポストも廃止、もしくは既存の大学への従属させる噂が流れていった。不安に駆り立てられた江紹原も北京の状況に無関心でいられなかつたはずである。

特約編纂員のポストは、まだ安泰だそうですし、薄給でつまらぬ肩書とはいえ、intensity（研究への専念）と自己を develop（啓発）する新

旧多様な興味への自由とを奪われることはあります。ですから、やはり北大とは係わぬ方が良いと思ひます。⁽⁴⁸⁾

研究ができる安定した環境への執着がそれだけ強かつたのであろう。だが、こうした判断の背景にあったのは、北京大学・中山大学で人事の軋轢のために苦しんできた経験であったことは言うまでもない。このうち周作人の方から北大復帰を求めるることはなかつたが、民俗学、北大の人事消息を伝えあう書簡のやりとりはこの後も絶えることはなかつた。

この時期、江紹原の北大復帰の可能性は完全に消えたかに見えたが、水面下ではなお継続して復帰要請が続けられていたようだ。明けて一九年三月からは北京大学復校の動きが現実のものとなると、懸案となっていた大学区制が廃止となり、蔡元培校長の復帰問題も一応の解決⁽⁴⁹⁾をみるなかで、北京から去った教員にも復校の呼びかけが行なわれた。学生会が学校側に招聘を要請した教員リストの中に江紹原の名前も挙がつてゐる。また、大学院特別編纂員廃止の噂は周作人・江紹原の往復書簡でもたびたび話題に上つており、江紹原もついに不安を振り切れなくなつたのか、六月頃からは北大復帰を具体的に考え始めた。その頃、北大の校長代理・陳大肅から新学期の担当科目を問い合わせる公文が舞い込んだ。

特約（編纂）員職首の可能性があるならば、勿論北大に戻るよりほかありません。そうでなければ戻らぬ方がよいと思うのです。この気持ち
は（周作人）先生が一番分かって下さると思います。

この公文の問い合わせにどのように答えたのかは書簡が失われているため不明だが、周作人の書簡を見てゆくと、復帰する旨返答したようである。⁽⁵⁰⁾とはいへ、復帰の意思是明確なものではなかつた。既に新学期が始まつた九月末に電報で上京を促されてから出発し、「もしまだ間に合えば北大で二、三コマ担当したいと思いますが、もし遅すぎたなら仕方ありません。北平に行くのは北大のためだけではないのですから」と述べているようすに、実状は江紹原自身の意思はほとんど無視されたまま、カリキュラムの中に組み込まれ、実際は最後まで自ら進んでの復帰ではなかつたことは間違ひなかつた。二九年秋の新学期は招聘された教員が不在のために休講となつた科目が極めて多数に上るのである。

本意ではなかつたとはいへ、こうして北京に舞い戻つた江紹原はのち逝去までのほとんどの年月を北京で過ごすことになる。

* 注記

- (1) 『周作人早年佚稿箋注』（四川文芸出版社九二年刊）二五年一月二九日
(2) 当時の事情を明らかにする材料は余り残されていない。恐らくは「一昨年（二四年）末から、私が教えている或る国立大学は盛大に給料遅配をやり」という

- (22) (21) (19) (18) (17) (16) (15) (14) (13) (12) (11) (10) (9) (8) (7) (6) (5) (4) (3)
- 事情（『髮蠶爪——關於它們的風俗』自序、開明書店一八年初版・上海書店八七年影印本）も大きいだろう。辞職の正確な時期は不明。二五年一月九日付の『北京大學日刊』（人民出版社八一年影印本）掲載の通告には「宗教史キリスト教史選択の諸君、小生はある事情で出講出来なくなりました。今学期に講義予定でまだ済んでいない項目については、作成したプリントを講義課に渡して配布します。年末いっぱいには全部仕上がります。御注意下さい」とある。また、翌年一月一〇日、三月一日には「まもなく北京を発ります。昨年お貸した本は返却されだし」という書籍返還の依頼を掲示しているので、三月初旬出发か。武昌大学は胡適の縁故を頼つての転職のようだ。
- 縁戚関係にあることについては、張挺・江小蕙「雪泥復見飛鴻爪——胡適又六封佚信箋注」（『魯迅研究月刊』九三年十二期）所収、江紹原宛書簡一九三一年七月九日付・注記九に見える説明、また、江小蕙女史からの直話『胡適來往書信選』（香港中華書局八三年刊）「七六、馮文炳致胡適」で、廃名（当時は本名の馮文炳を用いる）は『現代評論』を「努力」月刊と呼び、胡適への親近感から執筆していたことが分かる。
- 例えば、アナトール・フランスへの関心は、江紹原、周作人とも共通する。フランスに関する「法郎士先生の真相」などの当時の文章は、後に『西澄閑話』に収める。
- 新月社の名前はタゴールの詩集「新月」に因み、二五年以降は「胡適來往書信選」でも散見する。方念仁『新月的昇起——新月派作品選』前言（華東師範大學出版社九三年刊）では、文学団体ではないものの、社交的なサロンとして既に二三年には新月社が成立していくと指摘する。
- 『莽原』（上海書店八四年影印）第二〇期
- 『北京大學日刊』（前掲書）二五年八月二一日付
- 『晨報副刊』（人民出版社八年影印本）二五年九月十六日付
- 同上
- 『北京大學日刊』（前掲書）二五年八月二一日付
- 『晨報副刊』（人民出版社八年影印本）二五年九月十六日付
- 同上
- 同上
- 『黃狗与青年作者』被推敲之後『晨報副刊』二五年七月二一日付
- 江紹原は『現代評論』で、『語絲』（上海文芸出版社八一年影印本）掲載の小説「中山与其老黃狗」の未熟さを批判し、推敲を重ねなければ作者も作品も進歩できないと指摘したが、具体的な作品名を挙げて批判したことが反発を招き、また、その批判が『現代評論』で提出されたことも一層面倒な結果を招いたものである。
- The studies in the Psychology of Sex V*
- 『晨報副刊』一五年十一月一一日付
- 北新書局単行本広告も含むものであった
- 『自由的園地』の書名の由来も、作中の主人公カンディードが述べる「自分の畠を耕すのが一番だ」という言葉に拠り、周作人は自己限定に裏打ちされた独特の樂天主義を、この言葉で表現した。
- 徐志摩の訳書『韻第德』は、散文集『落葉』に引き続いで北新書局から一七年六月初版。『魯迅全集』十一卷（人民文学出版社十六卷本、章川島宛書信270717で、魯迅はいみじくも北新書局が徐志摩の翻訳を刊行したことを探して、「北新内部も腐敗し、例えば徐志摩、陳などややら（名前を忘れた・原文のまま）の侵入」と批判している。
- 『晨報副刊』（前掲書）二六年一月十二日付

〔晨報副録〕（前掲書）二六年一月一〇日付

同上

〔徐志摩全集〕第五卷（廣西民族出版社九一年刊）所収、周作人宛書簡二六年一月二六日
〔徐志摩全集〕第五卷（前掲書）、周作人宛書簡二六年一月三二日。なお、徐志摩は当時の書簡で、魯迅に対する対する嫌悪感を繰り返し示している。一つは
かつて『語絲』第三期に執筆した際に魯迅から批判を受けたこと、また、今回の論戦でも、魯迅の心底がどんなものなのか測りかねることを述べており、魯

迅に対する嫌悪感と周作人に対する親近感は実に対照的である。
一月から三月半ばまで、一ヶ月あまり帰省で不在の徐志摩に代わって、江紹原が主編をつとめている。この際に余上院との間にトラブルがあつたことは後述。

〔農報副録〕（前掲書）二六年八月二六日付

〔周作人早年佚簡箋注〕（前掲書）、周作人宛書簡二六年七月二日によれば、徐志摩から一、三週間主編代理を頼まれたと述べている。

〔語絲〕（前掲書）七八期

〔魯迅全集〕第十一卷（前掲書）書信270225

〔周作人早年佚簡箋注〕（前掲書）周作人宛書簡二六年十一月一日付。なお、許寿裳、章廷謙はいずれも親しい間柄からの信頼関係で誘いを受けたと理解できるが、江紹原の場合、北京時代の交流を考えれば決して親密なものではなく、経済的苦境から救う好意と後に見るような語学力への信頼であろう。また、こうした江紹原の希望も大きく作用したと考えられる。

〔魯迅全集〕第十一卷（前掲書）書信270623

〔周作人早年佚簡箋注〕周作人宛書簡二七年五月六日

〔周作人早年佚簡箋注〕周作人宛書簡二七年九月十八日付、傅斯年と会つて事情説明を受けた胡適が、この面会の際に誤解であると説明したようだ。「雪泥復見飛鴻爪——胡適又六封佚信箋注」（『魯迅研究月刊』九三年十一月号、一七年九月八日付）の江紹原宛書簡にも同趣旨の内容が見える。

〔周作人早年佚簡箋注〕周作人宛書簡二七年九月二七日付、なお、周作人宛書簡二九年八月二日、八月六日付によれば、江紹原は広州民俗学会から訳書の刊行の勧めを受けたときにも、応じていない。

〔周作人早年佚簡箋注〕江紹原宛二七年十一月十四日付注記7、及び、『魯迅全集』十一卷書信271031では「（辞職願いを出さずに）既に出てこられたのですから、今更広州に電報を打つ必要などありません」と江紹原の質問に答えている。

〔魯迅全集〕十五巻日記二七年十月十五日

〔魯迅全集〕（邦訳・學習研究社八五年刊）第十八巻（日記）巻末解説（渡辺新一著）で、毎月三百元の定期収入があつたのはきわめて貴重なことであつたはず、と指摘する。

〔雪泥復見飛鴻爪——胡適又六封佚信箋注〕二七年十月二日江紹原宛書信で、胡適は不在をわびている。

〔魯迅全集〕第十一卷書簡271120、また、「雪泥復見飛鴻爪——胡適又六封佚信箋注」（前掲）一七年十月二二日江紹原宛書信

〔周作人早年佚簡箋注〕、周作人宛書簡二七年十一月八日付

〔周作人早年佚簡箋注〕、江紹原宛二七年十一月十四日付

〔魯迅全集〕第四巻「我和『語絲』的始終」及び注釈。『語絲』に掲載依頼したパンフレットを、魯迅が文章の転載であることを理由に断わったため、江紹原が孫伏園主編の雑誌に掲載した。これを魯迅は不満の意思表示と誤解して、江紹原が『語絲』から遠ざかった理由とした。

〔周作人早年佚簡箋注〕江紹原宛書簡二八年十一月五日付

〔周作人早年佚簡箋注〕周作人宛書簡二八年十二月六日付。俞平伯からも説得を受けた旨述べている。

同上

(49) (48)

『北京大学日刊』（前掲書）二九年九月十二日、十三日付教職員宛、学生宛の公開書簡によると、代理として陳大斎が校長の実務を担当し、蔡元培は返電で可能な限り早く復帰することを約束した。

(50)

『周作人早年佚簡箋注』江紹原宛書簡二九年七月八日、七月二〇日付

(51)

『周作人早年佚簡箋注』周作人宛書簡二九年九月二七日付、また、江紹原の名前も明記したカリキュラム表が新学期早々発表になっていた。

*以上の本文中の括弧内の注記は特に断りがない限り小川自身によるもの。また文中の年号は西暦一二桁を示す。なお、関連箇所については、隨時、学習研究社の邦訳『魯迅全集』を参照したが、本文中の引用は拙訳によつていてる。

**注(48)に関しては、江小蕙「從一封信新發現的魯迅書信引出来的話」（『魯迅研究動態』八八年四期）で詳論されている。